

福不重至，禍必重來

環境科学部長／環境科学研究科長
井手 慎司

「福重ねて至らず、禍（わざわい）必ず重ねて来たるものなり（福不重至，禍必重來）」

漢代の中国で編まれた「説苑（ぜいえん）」という説話集にでてくる言葉だという。毎日新聞の看板コラム「余祿」（令和二年二月一八日）で知った。

幸運は連れ立ってやって来ることはないが、不運な出来事は必ず重なって起こるものだという意である。コラムによれば、英語にもよく似た箴言があるそうで、世界中で、また古来より、悪いことは続いて起こるもの——それが人類共通の認識であつたらしい。

コラムがこの言葉を引用したのは、今年の消費増税から個人消費が冷え込んでいるところに、台風による各地の被災や暖冬による冬季商品の販売不振が追い打ちをかけ、実質国内総生産が大幅なマイナス成長となっていたところに、さらに新型肺炎による経済の下振れリスクが懸念され始めていたからである。しかしどうだろう、掲載から一ヶ月以上が経ったいま、新型コロナウイルスは、下振れリスクどころか、世界中を席卷する「大禍」となってしまった。

上記の言葉は、立て続けに起こる厄災は人々の冷静な判断を狂わせ別の厄災を招き寄せかねないから気をつけるべきだとの警句と捉えることもできる。しかし、「福」は「不重至」であるにも関わらず、なぜ「禍」は「必重來」なのかという点について、もう少し考えてみたい。

たとえば、十年に一度起こるか起こらないかのような幸運な出来事があるとすると、そのような出来事が同じ年に重なって起こる確率は百分の一以下（つまり「福不重至」）となる。しかし、これは「幸運」を「不運」に置き換えても同じはずである。

にもかかわらず、少なくとも人々がそうは思わない理由として、我われ人類は「痛み」により敏感であるよう進化してきたからという事実がある。行動経済学の分野におけるプロスペクト理論の評価関数を使ってこれを説明しよう。

人々の意思決定の原理を説明するこの関数において、図の原点は参照点を表し、原点から右への移動は参照点からの利得、左への移動は参照点からの損失を意味する。これに対して縦軸は、それぞれに対応して人々が感じる価値の大きさを示している。この関数の最大の特徴は、図の左側の損失領域での勾配が、右側の利得領域よりも大きく、損失による負の価値は同じ程度の利得の正の価値よりもその絶対値が大きいという点にある。

要するに人というものは、損失による負の価値（痛み）を、利益による正の価値（喜び）より大きく評価する傾向があるということである。これは、たまたまやってきた幸運な出来事ばかりを憶えていて、無為に二匹目のドジョウを狙っていた我われの遠い祖先は生き残ることができず、危険な目（災い）に遭ったことをきちんと忘れずにいた祖先ほど逆に、そのときの体験を糧に、次なる災いをも切り抜けることができ、個体としての遺伝子を残しやすかったからと説明することができる。だからこそ人は、「福」より「禍」に対してより過敏に反応して、確率論的には同じはずなのに「禍必重來」と感じてしまうのだろう。

だとするならば、悪いことが続くことに、ただただ嘆いていても益はない。直面する「禍」を凌ぎきるために、これまでに培ってきた経験や知識を総動員することは当然のこととして、そうする中で新たな知恵や教訓をつかみ取り、次なる「禍」を防ぐために、また切り抜けるためにそれらを活かしていくことが肝要なのではないだろうか。

「禍必重來」の今まさに、そんな時だからこそ、「福」もまた同じ確率で「必重來」なのだと信じて前向きな気持ちになりたいものである。

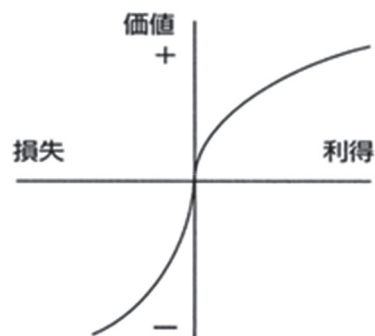


図 プロスペクト理論の評価関数
(トゥベルスキー & カーネマン)